年間企画

県外経済人編

脈うつ瓊林群像

長大経済学部100周年

丸高社長（瓊林会高知支部長）

高橋　光男さん（55）

＜エリート商社マンの道を捨て、家業を継いだ婦人服などの卸会社社長。四国・高知市近郊の生まれ。幼児期に両親が離婚し中学一年まで大阪で暮らした後、高校卒業まで京都府長岡京市にある臨済宗の寺で過ごす。京都府立乙訓（おとくに）高出身＞

この寺に住み込みで働く祖母について世話になった。有能な青年育成を目的にした法人塾で、十数人の大学生と寝起きを共にした。起床は五時。「作務」という境内の草むしりや朝晩の座禅も日課だった。一家団らん生活を知らなかったが、共同生活は人格形成のうえでとても貴重だった。

長崎にあこがれ

乙訓高は一期生の新設校で自由な気風があった。二年の時、修学旅行で初めて長崎に行った。原爆資料館で知った被爆の惨状に衝撃を受けた。大伯父が戦前、三菱長崎造船所の設計技師として戦艦武蔵建造にかかわっていたこともあり、異国情緒も豊かな長崎にあこがれ、海外への夢や商社に行きたいと思うようになった。

＜一九六七（昭和四十二）年、商学科に入学＞

少年のころからサイクリングが好きで入学後、全学のサイクリング同好会をつくった。翌年には部として立ち上げ初代部長を務めた。長崎の人たちの経済生に対する優しさは印象に強く残っている。

＜サイクリング部には、佐賀県出身で伴侶となるみゆきさん（長崎大教育学部）が一年後輩で入部している＞

家庭教師のほか、旅行会社の添乗員として高校生の修学旅行や大阪万博見学に随行したアルバイトは、楽しい貴重な思い出だ。

＜中島潤先生（当時助教授）のゼミ「国際経済」で学ぶ。卒論は先進国と途上国間の格差是正など南北問題について論述したという＞

部活、勉強もそれなりに充実した四年間だった。西ドイツを抜き国民総生産（GNP）世界第二位になり飛躍的な経済発展を遂げたころで、求職活動は夢実のような上司で「人間万事が塞翁が馬」を実感した。

＜だが、戦後間もなく紳士服卸業を興した祖父に口説かれ、わずか一年で退職する＞

オーストラリア・タスマニア島に初の海外赴任が決まり、いよいよという時期だったが、古里の家業を継ぐ腹をくくり七二年夏、高知にUターンした。少年、極的だ＞

今を大切に人とのつながりを大切にし、今できることに全力を尽くす。何事もバランス感覚が大事か。わが社も小さいながら新たな事業の柱を模索している。

＝学部十九回生＝（高知市在住）

【次回は28日掲載、元讃岐造船鉄工所専務の真鍋賢一さん】

サイクリングに懸けた青春

すばらしい出会い　くつろぎの空間

高橋光男さんが卒業する71年に現校舎が落成し、入学時はまだ木造校舎だった。「受験会場の講堂も洋館風で風情があった。木立に囲まれたキャンパスは、落ち着いた雰囲気と心地よさで、よく中庭で学友たちとくつろいだ」と懐かしそう。＝写真＝は入学式の時、正門で撮ったもの。

高知支部長を務める高橋さんは、全国28支部のうち最も若い支部長の1人。最近は転勤族が多くなり、会員は高商35回生から学部49回生まで十数人。先輩をはじめ、地元の県庁や金融界で活躍する後輩の世話役として尽力する。

社会人1年のトーメン時代、東京・本郷の東京支部事務所にり日歌（日道にし先と組出入大らを本寮祭（武館）参加を「暁淡を出し、て輩肩み星く」を歌ったという。古里に戻り即、支部に入会した。「高知生え抜きの素晴らしい先輩がおられた。新参者と変わらない私にとって瓊林会人脈は心強かった」と語る。